

岩淵水門と赤羽

— 荒川と洪水、台地と窪地をテーマに —

2019年11月

午前の散策⇒JR「赤羽駅」または南北線「赤羽岩淵駅」から岩淵水門へ。

午後の散策⇒赤羽の台地と窪地を歩く



午前の散策は、JR「赤羽駅」または南北線「赤羽岩淵駅」から岩淵水門へ。

駅から岩淵水門に向かって歩くと、川の手前右手に日光御成街道の第一の宿場岩淵宿の鎮守社であった八雲神社がある。赤羽が農村地帯であった江戸時代、この近くに岩淵本宿があり賑わっていた。



神社入口に「岩淵町々名存続期成同盟」と刻まれた石柱が、境内には「岩淵町 町名存続之碑」が立っている。住居表示法により住居表示の変更が進められていた昭和30年代末、誇りある岩淵の名を残そうと闘った住民の思いがこの記念碑に込められている。

境内のさらに奥には水神宮の小さな社がある。川沿いのこの付近はしばしば洪水の被害を受けてきたところであり、この社に荒川が氾濫しないよう祈願したと思われる。



土手に上り隅田川の上流部である新河岸川を渡る。ここでは2つの川が平行して流れ、川を渡った先のさらに高く築かれた土手を上ると眼前に荒川が広がる。岩淵水門は荒川の水が隅田川に分流するところにある。

かつて荒川の水は現在の隅田川に流れていた。このため東京の下町はしばしば洪水に見舞われ、こうした氾濫を防ぐために明治末に荒川放水路（荒川下流 22km、現在はここも荒川という）掘削の大工事が着手された。工事は昭和 5 年に完成し、ここより下流に荒川の新たな流路ができた。岩淵水門はこの時に荒川から隅田川への流れを調整する水門として作られた。大雨が降ると水門は閉じられ隅田川への流れが抑えられる。

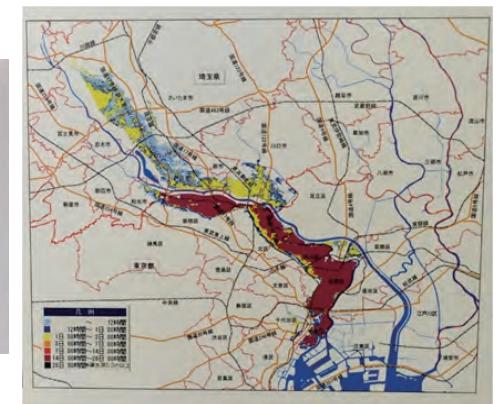
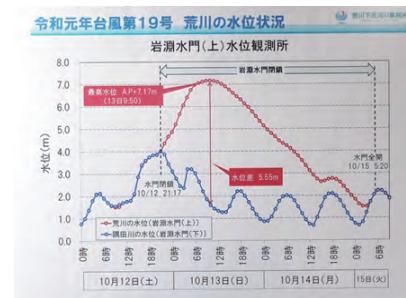


岩淵水門（赤水門）

この岩淵水門（赤水門）の老朽化が進んだ昭和 48 年に新たに水門、通称青水門が建設された。現在、赤水門は近代化遺産として保存されている。荒川の歴史や役割などについては水門に隣接する荒川知水資料館にパネルなどで説明がなされている。



青水門と台風 19 号による水位の上昇（荒川知水資料館）



岩淵地点で堤防が決壊すると荒川右岸低地の氾濫では決壊付近浸水が 5 メートル以上に達するとともに、浸水域が大手町、丸の内、有楽町の都心部に達する。また地下鉄に浸水し、地下の線路を通って都心の各路線を浸水させると想定されている。



過去の大水時の水位を記したポール

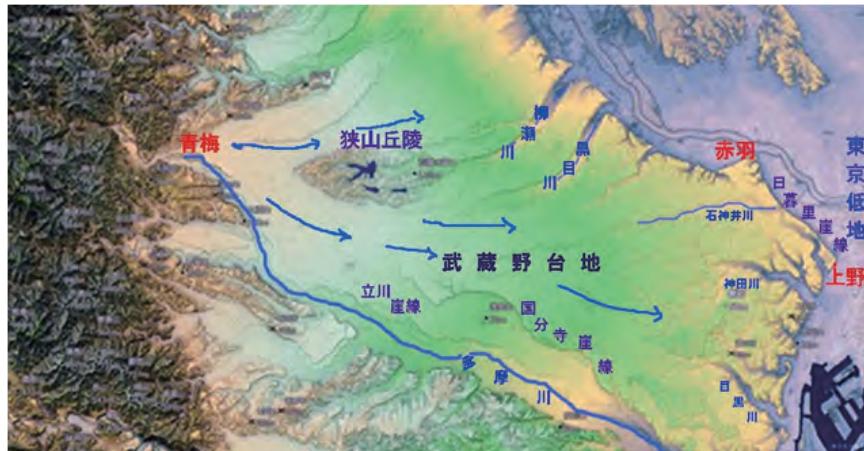


水門の近くに過去の荒川の増水時の水位をマークしたポールが立っている。東京に大洪水を引き起こしたキャサリン台風では普段より 8.6m 高い水位の上昇があり、また甚大な被害を各地に及ぼした 2019 年秋の台風 19 号の時も水位は 7 m を超えた。荒川の堤防に立つと海拔ゼロメートルの東京低地がこの荒川の堤防で護られていることを実感する。

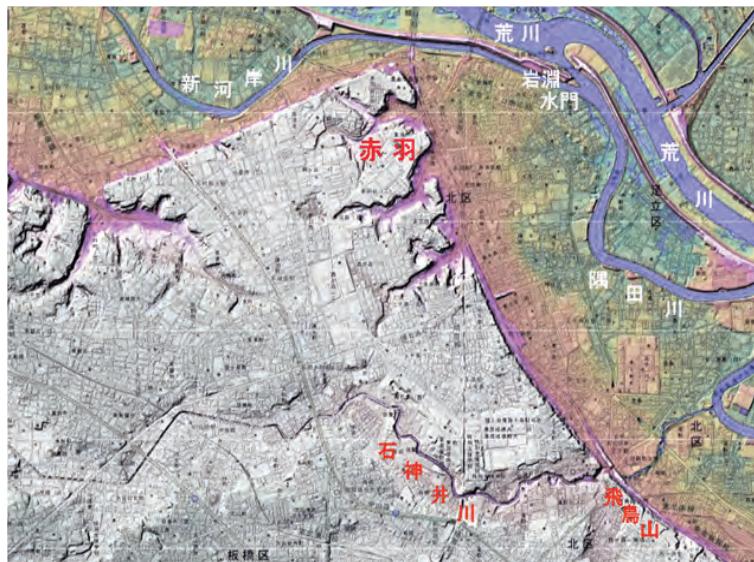
午後の散策では、赤羽の台地と窪地を歩く

赤羽の台地は、かつての多摩川の扇状地の扇端にあたるところ。

プラタモリ風になるが、多摩川は古くは東に向かって流れ、青梅を扇頂に巨大な扇状地を作っていた。この扇状地が現在の武蔵野台地であり、扇端で東京低地に落ち、北から流下する入間川とぶつかっていた。こうした地形は、カシミール3Dという3次元の地図作成技術で素人にもわかり易くなつた。



古多摩川の流れと扇状地であった武蔵野台地



赤羽とその周辺の地形

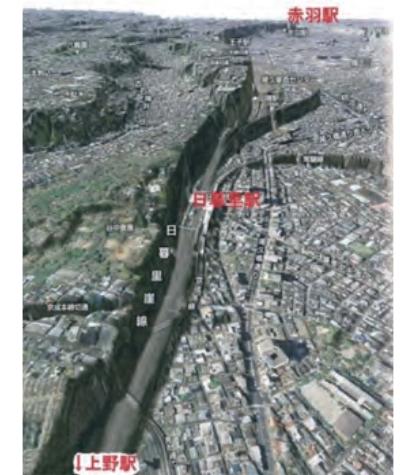
赤羽から上野に至る扇端部は、地図でわかるように地形的にいくつかの特徴が認められる。

① 赤羽付近では、台地が扇状地であることから比較的平坦だが、扇端部で川が東京低地に落ちるために侵食され、窪地がいくつも入り込んでいる。

② しかし赤羽以南では、日暮里崖線と呼ばれるみごとな崖が上野まで続いている（この脇を京浜東北の線路が走っている）。

これは旧石神井川の流れと関係がある。旧石神井川はかつてこの崖線の

内側の谷を穿って不忍池の方に流れていた。赤羽の歴史、また景観はこの地形的な特徴と関係があり、この点に注目しながら歩くと興味深い知見を得ることができる。



左半分の台地部分は明治末～戦前、右半分の平地部分は江戸末期を示す。

まず、赤羽台地の地形的特徴から軍が目をつけ、明治末から戦前まで台地の平坦部のかなりの部分が軍用地で占められていた。陸軍第一師団、近衛師団の諸施設と練兵場がこの広大な台地におかれ、また被服廠、火薬庫なども作られていた（前頁の地図の左半分）。

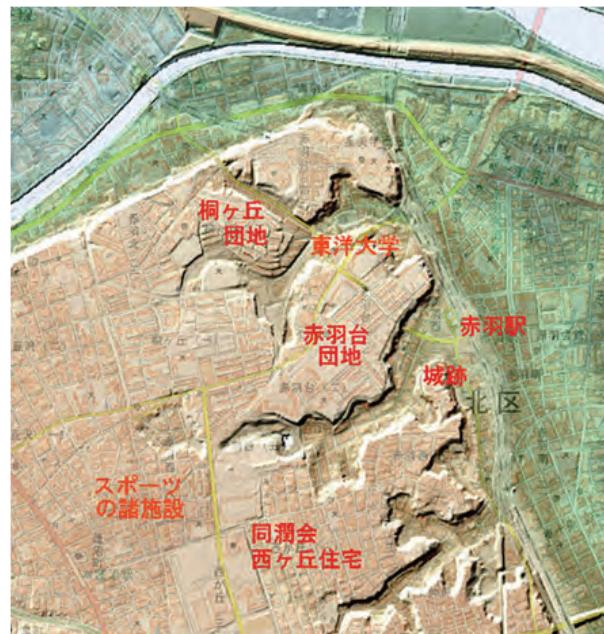
時代を江戸まで遡ると、赤羽の台地は

畠と林地だったらしく、現在の京浜東北線に沿った低地に日光御成街道が通っていた。街道沿いに家が並び、荒川に比較的近い岩淵には本宿が置かれ賑わっていたようだ（地図の右半分）。

荒川と台地に挟まれた低地は農業地帯だったがしばしば洪水の被害を受け、少し上流の浮間付近では水塚をもつ農家が多かったという。

水塚とは洪水で水没しないよう土盛をした上に建てた避難小屋で、脱出用の舟も用意されていた。

（この散歩で訪れる「赤羽自然観察園」に移築された旧家でみることができる）



水塚と洪水時の脱出用舟

軍用地は戦後に住宅公団の開発地となり、昭和37年に東京23区ではじめての大規模団地 赤羽台団地と桐ヶ丘団地が作られた。現在はこの時代の建物が老朽化したこと、「ヌーベル赤羽台」などと称されて立て直しが進み、高層化されている。平坦な台地の広大な空地には、オリンピック選手養成の施設やサッカー場などのスポーツ施設も多く、台地の一角を東洋大学が確保し、2017年に新キャンパスを開設した。また台地の南部には関東大震災後に開発された同潤会の住宅地があり、現在も桜並木のある閑静な住宅街になっている。

ちなみに同潤会は震災後の義捐金をもとに作られた団体で、同潤会アパートがよく知られているが、住宅分譲なども事業として行っていた。



オレンジ色の線は台地と窪地の境界、黒の線は散策ルート

【散歩のルート】

以上、赤羽と岩淵について地形と歴史を簡単に紹介したが、散歩は台地と窪地が複雑に入り組んでいる地形に注目し、この境界線を歩く。

ルートを記した地図にみるように、入り組んだ台地の先端にある太田道灌が築いた稻付城跡から台地を歩き、その縁に位置する神社や寺、また深い窪地の自然観察園の緑の森を散策する。



台地から窪地を望む

赤羽駅⇒⇒イトーヨーカ堂の横を左折して稻付城址（静勝寺）へ。

ここから台地の上、台地の縁を歩いて香取神社へ。神社は崖の縁にあり十条の台地を望むことができる。⇒⇒神社の横の石段をいったん下り、崖に沿って坂を上り台地の縁にある法真寺へ。境内に樹木が多く深山にやって来たようだ。庭はよく整えられている。台地の縁を歩き再び石段を降りて鳳生寺へ。寺は太田道灌が開基と伝えられている。



法真寺の境内

この公園は谷地形の大きな窪地があり、戦前は軍が戦後は自衛隊の駐屯地として利用してきたが、現在は自然が再生されている。窪地の底に当たるところに湧き水による池があり、地域にもともと自生していた植物の回復が目指されている。また昔の農家が移築されていて、みごとに自然が再生されている。



赤羽自然観察園



赤羽自然観察園に移築された農家

⇒⇒ここから再び長い階段を上って台地の上に、赤羽台の巨大な団地を通って赤羽駅に戻る。

赤羽は京浜東北線、埼京線、上野東京ライン、新宿湘南ラインが入る大都会に発展しているが、むかしから居酒屋のメッカでもあり、帰りにちょいと寄ってみるのもいいかも。



赤羽小学校正門前に並ぶ居酒屋